

氏名	森本頼子		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第7号		
学位授与年月日	平成27年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者		
題目	学位論文題目 シェレメーチェフ家の農奴劇場（1775～97年）におけるトラジェディ・リリック上演——フランス・オペラ受容からロシア・オペラの創出へ		
学位論文等 審査委員	（論文審査主査教授 井上さつき 及び最終副査教授 村田四郎 試験）外部 審査員 教授 森田稔（宮城教育大学名誉教授）		
学位論文の要旨			
<p>ニコライ・ペトローヴィチ・シェレメーチェフ伯爵（1751-1809）が中心となって運営した、シェレメーチェフ家の劇場は、農奴劇場の代表格として知られる。ニコライは、21万人にも及ぶ農奴のなかからすぐれた人材を選んで一座を組織し、モスクワとその近郊に専用劇場を建て、招待客の前で公演を行なった。この劇場は、多くのフランスのオペラ・コミックをロシア初演したことで知られるが、その一方で、フランスの二つのトラジェディ・リリックのロシア語上演を行なったことは、ほぼ見過ごされてきた。トラジェディ・リリックは、高度なテクニックをそなえた歌手、大規模なオーケストラと合唱団、踊り手、豪華で複雑な舞台装置などが求められる点で、オペラ・コミックよりも上演にはるかに手間のかかるオペラ・ジャンルであり、当時のロシアでは、宮廷劇場を含むあらゆる劇場で上演されておらず、また世界的にみても、この取り組みはごく珍しいものであった。</p> <p>それにもかかわらず、これまで、この劇場におけるトラジェディ・リリック上演については、上演作品の少なさからまったく注目されず、掘り下げた研究も行なわれてこなかった。本論文の目的は、シェレメーチェフ家の劇場におけるトラジェディ・リリック上演がいかなるものであったのかを明らかにし、その取り組みをロシア・オペラ史のなかに位置づけることである。</p> <p>本論文は、全2部5章から構成される。全2章からなる第1部では、この劇場がトラジェディ・リリック上演を行なった背景を明らかにするために、この劇場を取り巻く状況について広く考察した。</p> <p>第1章では、シェレメーチェフ家の劇場の概要を述べた。第1節では、先行研究について概観し、この劇場が、演劇史および音楽史の文脈のなかで、「オペラ劇場」として十分な位置を与えられていないことや、トラジェディ・リリック上演の意義についても検討されていないことを指摘した。第2節では、ニコライの生涯とその劇場運営の推移を追い、彼がフランス・オペラを中心とした上演活動を行なうようになった背景には、西欧遊学時のパリにおけるオペラ体験の影響があったことを述べた。第3節では、劇場の沿革、一座、レパートリーについて概観し、ニコライが一座を非常によく考えて整備するとともに、モスクワの他劇場</p>			

を意識することにより、フランス・オペラに独自のレパートリーを求めていったことを明らかにした。

第2章では、シェレメーチェフ家の劇場におけるフランス・オペラ上演の特徴を明らかにするために、ロシアの他劇場におけるフランス・オペラ受容の状況について論じた。第1節では、サンクト・ペテルブルグの宮廷劇場および学校劇場を、第2節では、モスクワのおもな農奴劇場と学校劇場を、第3節では、シェレメーチェフ家の劇場と多くの共通点をもっていた、イギリス人興行師マドックスがモスクワで運営した公衆劇場を取り上げた。いずれの劇場でも、広く上演されていたのは、フランスのオペラ・コミックであり、ペテルブルグでは原語上演が優勢だったのに対し、モスクワではロシア語による翻訳上演が一般的であったことが分かった。そして、マドックスの劇場のフランス・オペラ上演は、シェレメーチェフ家の劇場のそれと相関性があったことが推察された。シェレメーチェフ家の劇場におけるトラジェディ・リリック上演が特異なものであったことが浮き彫りになった一方で、フランス・オペラの翻訳上演や、オペラ・コミックのレパートリーの共通性からは、その取り組みが、他劇場のオペラ上演と完全に切り離されたものではなく、密接なかかわりのなかで行なわれたものであることが考えられた。

第2部からは、シェレメーチェフ家の劇場におけるトラジェディ・リリック上演について論じた。本論文では、その対象を、取り組みが始まった1784年から劇場活動が終息した1797年までにしぼり込み、さらにこの14年間を取り組みの内容によって三つの時期に分け、全3章にわたって考察した。

第3章では、トラジェディ・リリック上演をめぐるさまざまな試みがなされた1784～86年について論じた。第1節では、トラジェディ・リリック上演のために尽力した、パリの音楽家イヴァールとニコライのやり取りの概要について述べた。先行研究では、イヴァールの人物像はほとんど明らかになっていなかったが、フランス側の資料をもとに、イヴァールが長年にわたってパリ・オペラ座でチェロ奏者を務めていたことを突き止め、トラジェディ・リリック上演を実現するうえで不可欠な存在であったことを指摘した。第2節では、ニコライとイヴァールの往復書簡を分析し、この時期に、ニコライがトラジェディ・リリックへの関心を高め、上演準備を進めていったことを明らかにした。第3節では、グレットリのオペラ・コミック《サムニウム人の婚礼》上演（1785年）を取り上げ、この作品が正歌劇の性格をそなえており、上演にあたっては、この特性がニコライによっていっそう引き立てられたことを指摘し、それがトラジェディ・リリック上演の試金石となったことを明らかにした。第4節では、サリエリのトラジェディ・リリック《ダナオスの娘たち》上演の試み（1784～87年）を取り上げ、ニコライがこの作品の壮大な舞台づくりに注意を払いながら上演準備を進めるとともに、彼が作品の音楽性、スペクタクル性、話題性に強くひかれていたことを浮き彫りにした。

第4章では、トラジェディ・リリック上演が実現した1787～92年について論じた。第1節では、往復書簡を分析し、ニコライのトラジェディ・リリックに対する興味がいっそう拡大し、多くの作品の上演を目指していたことを浮かび上がらせた。第2節では、この時期にニコライによって行なわれた劇場の環境整備について考察し、それらがトラジェディ・リリック上演を見越したものであったことを指摘した。第3節では、サッキーニのトラジェディ・

リリック《ルノー》上演（1788～92年）について、現存楽譜をもとに、ロシア語上演の実態を明らかにし、そこから、この作品の上演には、正歌劇をロシア化するという狙いがあったという結論を導き出した。第4節では、《マッサゲタイの女王、トミュリス》創作（1790～91年）を取り上げ、この作品がトラジェディ・リリックに類似した性格をそなえており、さらに、創作にあたっては、ニコライがトラジェディ・リリックの枠組みを使って、ロシア語による正歌劇を創り出そうとしていた可能性があることを指摘した。

第5章では、ロシア・オペラが創出され、劇場活動が終わりを迎えた1793～97年について論じた。第1節では、この時期に、ニコライとイヴァールのやり取りが途絶え、フランス・オペラ上演が減少した背景について考察した。フランス革命の影響により、エカテリーナ2世がフランスとの交流を制限する政策をとったことにより、ニコライがフランス・オペラ上演を柱とした劇場活動の転換を迫られたことが推察された。第2節では、ロシア・オペラ《ゼルミーラとスメロン、またはイズマイル占領》の創作と上演（1795年）について、現存台本をもとに考察した。このオペラには、トラジェディ・リリックに類似した「抒情劇」という名称がつけられているほか、大人数の出演者や大がかりな舞台装置、音楽とバレエの重視といった点で、トラジェディ・リリックとの関連性を見出せたほか、その筋書きは「救出オペラ」と酷似していることが明らかになった。したがって、このオペラは、この劇場における幅広いフランス・オペラ受容のもとに創出されたものであったという結論に至った。

本論文を通じて、ニコライがトラジェディ・リリック上演を強く志向し、試行錯誤のなかでロシア語による上演を実現し、さらには、それを足掛かりにしてロシア語の正歌劇を創出したという、シェレメーチェフ家の劇場のオペラ上演のダイナミックな流れが浮き彫りになった。同時にそれは、この劇場が、あくまでもオペラというジャンルに強い志向性をもち続け、オペラ文化黎明期のロシアで、「オペラ劇場」としてその発展を支える存在であったことを示唆している。

さらに、この劇場におけるトラジェディ・リリック上演は、これまでロシア・オペラ史のなかでその存在が軽視されてきた農奴劇場が、実際には、きわめて豊かなオペラ文化を創出する場として重要な役割を果たし、ロシアの人々のあいだに19世紀のオペラ文化の開化を受け入れる素地をつくるのに寄与していたことを示すものである。また、この取り組みは、フランス・オペラ受容を通じてロシア・オペラが創出された事例の一つとして、ロシア・オペラ史におけるフランス・オペラの影響力の大きさをあらためて浮き彫りにするものである。したがって、本論文は、イタリア・オペラ受容の側面から描かれることが多かった、従来のロシア・オペラ史観を大きく塗り替える端緒となりうるだろう。

以上のように、シェレメーチェフ家の劇場におけるトラジェディ・リリック上演は、農奴劇場が18世紀後半のロシアのオペラ文化発展の一翼を担い、そこではフランス・オペラが重要な役割を果たしたことを示すものであると結論づけられる。

論文審査結果の要旨

森本頼子氏の学位論文は、18世紀末に、ロシアの貴族、シェレメーチェフ家の農奴劇場で上演されたフランスのトラジェディ・リリックに着目し、その取り組みがどのようなものであったかを明らかにし、その取り組みをロシア・オペラ史のなかに位置づけることを目的としている。

本論文の独創的なところは、

1. 同劇場で上演されたフランスオペラの中でも、特にトラジェディ・リリックに着目した点。これまではフランスオペラとひとくくりにされてきたオペラ作品を、きちんと峻別して扱ったこと。オペラ・コミックではなく、大規模なトラジェディ・リリックに焦点をあてることで、シェレメーチェフ伯爵のめざした方向性を明らかにした。

2. きわめて実証的な研究であること。特に、第2部のシェレメーチェフ家のオペラ上演については、ロシアの史料館はもちろん、関連するパリの史料館をも探索し、この話題に関して、現在入手可能なあらゆる史料を駆使している。なかでも、ニコライ・シェレメーチェフ伯爵と、フランスのオペラ座のチェリスト、イヴァールとの往復書簡の読みこみは秀れている。これまで、この資料はロシア語の翻訳で知られていたが、森本氏は原文の手書きのフランス語の全文の解説から始め(その翻刻と日本語訳が資料集に収められている)、特に、その計算書と呼ばれる書類の精査により、シェレメーチェフ伯爵が何に興味をもち、フランスから何を仕入れていたかを調べ、シェレメーチェフ伯爵の意図を明らかにした。

3. さらに、ニコライ・シェレメーチェフ伯爵がフランスオペラを上演する際にロシア語訳にこだわったことにも着目し、残されている楽譜(サッキーニのトラジェディ・リリック《ルノー》上演)の分析から、そのロシア語訳が、これまで考えられていたように、演奏する側の能力を考えてのことだったのではなく、トラジェディ・リリックをロシア化するというねらいがあったという刺激的な結論を導きだしている。

4. さまざまな事例研究を重ねて、森本氏は、ニコライがフランスの今の流行に敏感に反応し、そこから自分の劇場でのロシア語によるトラジェディ・リリック上演を志し、その試みをさまざまに行うことで、ロシアに合わせたトラジェディ・リリックをモデルとした正歌劇の創出を試みた、というダイナミックな流れを浮き彫りにしている。

本論文は予備審査等を通して、章立てや注の記述の仕方等も整理され、文体にも読みやすさを志向して工夫が加えられた。しかし、きわめて複雑な内容であることから、章立て等、さらに検討の余地がある。また、シェレメーチェフ家の農奴劇場をとりまく状況について考察した第1部には、より詳細な記述が必要とされる箇所もある。

とはいえ、全体として、森本氏の本論文は、シェレメーチェフ家のオペラ劇場について、ロシア側の史料とフランス側の史料を双方向からつきあわせ、さらに、「トラジェディ・リリックのロシア語上演」というファクターに注目することにより、新しい光をあてた、きわめて独創的な論文であり、博士論文の名にふさわしい内容と、読みやすく洗練された文体を備えている。国際的に見ても評価に値する。

よって本論文を博士の学位に値すると判定する。

最終試験結果の要旨

この最終試験では、森本氏の学位申請論文の評価について確認を行った。森本氏の論文は広範な歴史資料を駆使した、実証的で説得力に富む研究である。

今後、森本氏が音楽学者として、社会に大きく貢献できる人材であることを確認して最終試験を終え、審査員全員一致で成績優秀であることを認め、合格と判定した。